東洋大学図書館ニュース

KOΣMOΣ

Vol. 9, No. 1 (No.26) 1974. 7. 10

閲覧からお知らせ 2
関西の二大学図書館見学報告 4
悪魔祓いのこと 5
本学に学んだ人々 —1—坂口安吾 5
雑誌目録作成にあたって 6
参考図書の解題 7
日誌(5月〜6月) 8

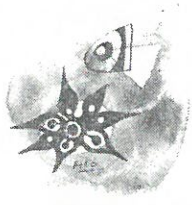
回　想

溝　口　寿美子

この頃妙に昔がなつかしい。楽しかった学生時代のことになると兄が関連する。兄は読書家だった。兄の部屋は本で一杯だった。そろそろ大学生になる頃から私も兄に負けずに本を集め出した。余程都合が悪い時以外は二週間に一度位，必ず神田に出かける。古本屋街を一軒一軒あさり歩く。そして5，6冊位かかえて得々と家に帰り，半間の押入に作ってあったフォルマリンの消毒箱に入れる。何日間位入れたかは忘れたが，父にしかられるので兄妹二人してこれは必ず守っていた。あのにおいすら今はなつかしい。取り出して日に当て，風を通し，公然と手に出来る日がとても待ちどうだった。兄に「なんだそんな本かい。」など云われるとすっかりしょげてしまう。「すごい，そりぁみつけものだ」など云われれば天にも昇る思いだった。大学に入学出来たあのうれしかった日に私は自分の心にちかった。「よし卒業まで毎日一冊読もう」往復約3時間の通学時間は貴重だった。当時は国鉄と云わず省線と云ったが，省線の中でこのまま終点まで行ってしまいたい，と思ったことが何度もある。とにかく工夫して，何とか計画通りやり続けた。兄は医学部出身であるが美術・音楽・文学と広く愛好していた。私は兄から刺戟を相当受けた。兄のインターン時代には1ヶ月に一度位朝5時起してハイキングにつれて行ってもらった。それはお互に読んだ本について話し会うすばらしい日であった。

私達の好きだった箱根周辺も，今は全く昔の面影を失ってしまった。私達の本も大部分はない。終戦の年，あの3月9日の夜から10日にかけての東京大空襲の時に蒸し焼になってしまった。何千度もあったであろう猛火に囲まれてはコンクリートの部屋の中でも遂に助からなかったのである。私達は一度に沢山の大切な，大切な友を亡くしてしまった。そして今はもう兄もこの世にいない。私は思い出すと涙がこぼれてどうにもならない。

（短期大学学長）



閲覧からのお知らせ

本館から

カウンター業務を一部変更しました。

新図書館の開館と同時に，スタートした閲覧業務の利用システムを今般次のように改善しました。

①開架，閉架図書館内貸出係。②開架，閉架図書館外貸出係。③館外貸出登録者手続係。④複写受付，共同研究室係。⑤参考，雑誌係。この様に出納業務係を変更した主な理由は，㋑年々図書を利用する人が増加していること。㋺利用者は開架書庫に最も近い開架図書館外貸出係に集中し，その結果，図書の手続がスムーズに行なわれず，その場所が極めて混乱したこと。㋩カウンターの係員の業務分担を集中化し，それによって利用者に対するサービスを強化したこと。などによるものです。この様なカウンターでの業務係の改善によって，従来起っていた利用面での頻雑が，今後少くとも緩和されることを期待しております。

分館から

回りに緑があるからいくぶん気はまぎれるものの，夏の暑さはどこも同じで，分館の閲覧室も例外ではない。昨秋，屋上への出口を設けて，屋上の側面の窓が開けられるようになった。分館の屋上は二段になっていて，閲覧室の屋上と，ロビーの屋上とが段違いになっているが，その段違いの側面の窓八枚のガラス戸が開け立てできるようになった。しかし，これとても風が吹けば涼しい程度で，クーラーの設置が待たれるきょうこの頃である。なお一般学生は屋上へは出られない。

運営委員会の指示により，最近になって閲覧室の出入口をせばめた。かつて，広すぎるきらいもあったカウンター前を，ぐっとせばめたわけだが，これにより閲覧業務がしやすくなったことは否めないであろう。また，この春，参考図書用の木製書架を七台購入した。これまでの七台と並べて閲覧室に置いてあるが，これには人名辞典・百科事典・地名辞典・大型美術本・語学辞典等を排架してある。学生には百科事典がよく利用されるが他の参考図書もゆくゆくもっと充実させたい。

最後に，書架のスペースについてであるが，最近頓に1，2，3門の図書がふえたこともあり，今春，文学関係のうち，英米文学あたりから最後までを一階の書庫に移した。また，続々と増える製本雑誌の置き場所も悩みのたねで，一時，分館長室を使用することとなり，現在準備中である。分館の一部を使用している電算室の移転が来秋ごろになる予定で，ここ当分のやりくりが大変である。

（小林　隆夫）

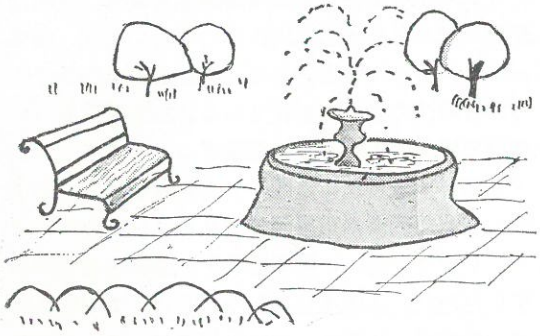
ずいそう・しちょうかく

視聴覚室が昼休みに行っているレコード・コンサートで，スーザ作曲のマーチを特集したことがある。コンサートが終って，昼食をとるために街へ出たところ，パチンコ屋から聴いたばかりのマーチが流れていて，思わず苦笑してしまった。コマーシャルのバックにベートーヴェンの「運命」が使われていたり，喫茶店でもデパートでもいたるところで音楽が耳にとびこんでくる。公害，公害とさわがれているけれども，「音楽公害」という言葉も造れるのではないかと思ったりする。

「テレビやステレオばかりにかじりつかないで。」というのは教育ママさんのログセだが，本さえ手にしていればお勉強という育ち方はどんなものだろう。見たり聴いたりが暇人の遊びのような感じにもとる人はとるらしい。

こんな状況の中で，レコード・コンサートを行う意味，プログラムの構成などについて，あらためて深く考えてみる必要を感じている。

ぷらざ で りぶろ



鈴木 勝忠著

「俳 諧 史 要」

（明治書院）整理中

俳諧史と題する書物はざらにありそうであって，実はそう多くはない。それは俳諧史というものが，あまりにも流動と波乱に満ちており，雅と俗二極への志向線が入り乱れていて整理がつかないからである。

もう一つ，俳諧史と題する書物の少ないのは，従来の俳諧史観が，蕉風のみを展開の軸に据えたものであって，蕉風の発生史と展開史のみが俳諧史であったためである。

本書の著者鈴木勝忠氏は，雑俳（前句付・折句・笠付）の資料の収集と紹介とを営々と続けられ，さらに昭和43年，2万5千語を収録した「雑俳語辞典」を独力で著した。俳諧史を，その現実の姿から目を放さず，頂点を結ぶのでなく，底辺の動きそのもので見ようとする最適任者は，氏をおいてはない。

氏は，談林内部に「まこと」を志向して蕉風を生む要素と「うがち」を志向して川柳狂句に至る要素とが混在していたとする。また，元禄新風の樹立は，心ある俳人のすべての胸を去来した思いであると言う。そして，蕉風とは，氏によれば，京・江戸の貞門第三の新人によって，乱雑な風俗主義・人事句から貞門的反省として景気（叙景）の句の尊重となって出現したものである。

蕉風樹立を個人芭蕉の功績とのみ見ず，貞門談林の動き自体の中に見ようとする氏の姿勢が，このような考察の中にうかがわれる。

全体を通じて，しかし，かならずしも明快な記述ではない。紙幅の制約のためでもあろうが，氏のひとり合点，あるいは独断ともとれる箇所が多く，また事実の網羅に追われている傾きもある。そして，俳諧文芸に対する氏の価値観が読者に明確に伝わって来ないもどかしさが残る。

しかし，原初連歌から説き起し，戦後の俳壇，および川柳革新運動までを，すべて具体的資料に基いて記述している本書は，随所に新見・創見をちりばめて，数千ページの大著に匹敵するの姿を見せている。（短大日本文学科助教授・村松友次）

The American Chemical Society 編

"Chemical Abstracts"

Abstracts 誌はこの欄には相応しくないかもしれない。しかしながら4年生や修士の2年生で論文をまとめようとしている方や，研究の動向を探っている方，また我々物性物理や半導体工学を研究している者にとってこれだけ役立っている書物は他にあまりない。もちろん化学が中心であるが物理分野の項目もかなりあり，諸種の Abstracts 誌のなかでも最も充実したものでしょう。

自然科学の急激な発展の中で発表される論文の数は幾何級数的に増大しており適切な情報を迅速に処理していかなければならない。この目的で Chemical Abstracts 誌の果たす役割は非常に大きい。今，最新号の Vol. 80, No. 12 を開いてみると，じつに週刊誌ながら，約 600 page にわたる内容で，本文の Abstracts が 484 page, Keyword Subject Index が 72 page, Auther Index が 23 page. etc. etc. となっている。小さい活字をよくこれだけつめこんだと思われるほどその引用文献の量は膨大で，ほとんど全世界の文献から集められている。

最も一般的な利用法は Keyword Subject Index から引く方法で，たとえば Cd Se という物質に関する最近の論文をみようとすると，その Index でまず Cadmium selenide という項目を引くと，Cadmium selenide……，といういろいろないくつかの項があり，その中でさらに自分の目的とした項目 Cadmium selenide recombination center といった項がでてくる。その後に 64871u といった番号が付けられているのでその番号の Abstracts 本文を見る。そこには，著者名，所属

機関名，雑誌名，年号，巻，号，page，(国名)，Abstracts といった順にまとめられている。そこで，Abstracts を読み，さらに詳しい内容は原論文の載っている雑誌を調べる。なおかつ詳しい事柄は原論文の References を調べるか，著者に手紙を出す。この Keyword は1つの論文に対していくつかついており，いろいろな角度から調べられるので自分の調べようとする研究テーマにそった Keyword はいろいろ用意しておかなければならない。

Abstrracts 誌は他にも Physics Abstracts, Electronics Abstracts などがある。卒論や修論をまとめられる方にとって，その研究の歴史的位置を調べる場合にも，さらに最近の研究の動向を調べるにもぜひ Keyword をひもとかれるようにと思います。注意しなければならない点は Abstracts 誌に記載されるのは原論文より何ケ月かの時間遅れがあるので平常は自分の研究テーマにそった雑誌そのものに注目しているのがいちばん良い。もちろん，学会や，国際会議に出席していつも最近の動向に通じているのが一番だが，論文としてまとめられるものはある程度の検討を経て，認められたものが多いので普通は学術雑誌の原論文を検討し，自分のデータと比較してみることから始まる。

東洋大学工学部図書館では1941年から現在まで発刊されたものをずっとそろえてあり，Abstracts 誌を読んで探した文献の本論文が図書館にないときは，カウンターに申し込むと，迅速にとりよせてもらえます。　(工学部助教授・増山昭夫)

——◇——◇——◇——◇——

関西の二大学図書館見学報告

京都への所要のため5月23日出発して当日の用事をすませ，翌24日新館の完成した同志社大学図書館と機械化されているといわれる京都産業大学図書館を見学した。

同志社大学は伝統的な他の建物との調和を計り，レンガタイルの意匠とデザインが特徴的である。設計，内部諸施設は館員の長期にわたる充分な調査，研究によって創意，工夫のあとがうかがわれる。その中には本学図書館の長所もとり入れられているようにも思われた。

先づ図書館の建築面積2,700平方メートル，延約9,200平方メートル，地上3階，地下2階，鉄筋コンクリート建で閲覧座席数1,200席，全館冷暖房で利用者が快適な居住性のもとで研究，勉学ができうるよう考慮されている。建物の内部は吹抜けを設けて採光をかねている。主な閲覧施設も玄関の床面を中心として半階ずつ上下にずらせたフロアーで造られ，玄関ホールから半階上った1階に図書館機能の重要部分であるメーンカウンター，目録コーナー，開架閲覧室，雑誌・参考図書室が置かれ，玄関ホールから半階下った地階には，閲覧室，新聞コーナー，展示コーナー，ラウンジが配置されている。2階は，内部に小庭園，これを囲んでラウンジ，閲覧室，AV室，マイクロリーダー室等がある。書庫は2階の閲覧施設をはさむ形をとっている。

蔵書数は約25万冊であるが完成後は70万冊を収蔵しうるといわれる。特に施設の中，注目したのは4万5千冊の図書が配架されている開架閲覧室を新らたな形で設計したことである。一つの床面の真中を円形に低く，その中に閲覧設備をして円形の周囲に図書を配架して利用させる方法，これは同一の床面に多数の書架を設置するよりも明るく，且つ書架による圧迫感を低減させる一方法であろうことを覚えた。

最近，利用者数の上昇と業務量の増大により館員の兼担業務も多くなり増員の必要に迫られているとのことである。午后は図書館業務について機械化されていると云われる京都産業大学図書館を訪ね機械化についての問題点等をうかがった。この大学は昭和40年4月設立されたのであるが，当初からの計画として電算センターが設置され，現在4台の機械が備えられ，教育，入試，経理，健康管理，就職等の業務の他，図書館業務にも利用されている。図書館のシステムは中央に整理室があり，総べての図書発注，受入，整理を行ない整理済の図書は各学部ごとの分室に送られて閲覧，貸出等利用に供される。特に整理は洋書を主とし，冊子目録形式で行っている。和漢書および雑誌についても行ないたいが十分検討した上で実施したい。しかし来年開学十周年にあたるため雑誌目録はどうしても作りたいなど意欲の程がうかがわれた。最後に機械化を行なうにあたっては電算機に関する十分の研究と理解が必要であることが力説された。　(整理課・高橋)

悪魔祓いのこと

平野　威馬雄

ぼくは小，中学校ともに，東京の，或るローマン・カトリック経営になる学園の寄宿舎でくらした。朝から晩まで，神秘的な中世風の教理の中で呼吸していた。だから，自然と一種のミスティシズムの雲に包まれて生長したといえよう。そこでは，未だに，魔女狩りの伝説が生きていた。手に負えない悪戯っ子（たとえば，ぼくのような）は，救いようのない「サタン(魔鬼)」に憑かれているために，先生の言うことをきかないのだ……と，黒衣の神父さんたち（いずれも教師である）は，思い込んでいたのだから，エクゾルシス（Exorcise）という変てこな典礼をする。匂いのない水や，まつやにのツブを燃した煙で，おはらいをする。迷惑千万なことだった。公教要理（Catechism）という問答体の教理修得本を週に二回，読まされ，暗誦させられるのだが，之が亦，死ぬほど退屈で，白髪の神父が，まじめくさって，

「ときどき，天井を歩く悪魔の足音をきくことがある」

「ある時，悪魔を遂に見た。ファウストの，メフィストフェレスそっくりで，こうもりの翼とよく似た翼をもち，ギョロリと，私をにらんだ」

「神は，悪魔をも，おつくりになったが，それは，人類を，試練する為めで……」と，いうようなことを，くどいほど聞かしてくれた。

だから，ぼくは，いつの間にか，悪魔という，西欧的なイメージが，生活の中に溶け込んで行くのを，どうにもふせげずに生長した。

そして，今では，かえって，神様のコワモテな倫理より，悪魔の，真剣な誘惑の方に愛着を感じるようになった。

心霊科学の世界でとりあげている poltergeist ——つまり，「騒がしい幽霊」の現象が，ひょっとしたら，「悪魔憑き」ではなかろうか……と，考えたりしている。

つまり，この七月にW.B.映画で封切られる「エクゾシスト」という，とんでもない恐るべき映画にとり上げられている「悪魔につかれた女の子」のはなしなど，このことに，ポルターガイストに該当するのではなかろうか……と，思うのである。

どこからとなく石が投げこまれ，天井に，すごい音が起り，食器や家具がこわされ，刃物がとんできて人に刺さったり，室内のもの皆浮上がったりガタガタ動き出したり，いろいろな物理現象が同時に起る現象で……A.D. 八五六年の記録もある。

とにかく，「悪魔憑き」の現象について，昔風のキツネツキだとか，幽霊屋敷だとかで片づけてしまわないで，とっくり，四つに組んで，追求してみるのも，あながち，ムダではないような気がする。

（詩人）

《本学に学んだ人々》—①—

坂口安吾とその資料・作品

本学80年余の歴史は，多くの人材を世に送った歴史でもありました。そのおびただしい群像のなかでも，創立者・井上円了と作家・坂口安吾を〝この二人が私達新潟の出身でして……〟と土地の人々が誇らしげに語るのを幾度かきいたことがあります。

坂口安吾が本学に学んだのは昭和2年から5年のことで当時の学長は中島徳蔵先生でした。そうして幾年もたたぬうちに大学とこの周辺は白山文芸運動の華々しい興隆をみます。新潟の人々に呼応するかのように大学にとってもまことに誇らしい時代であり，この時代に坂口安吾は一学徒として学んだのです。しかし，このような背景にもかかわらず安吾とその作品は，この時代背景とほとんど無縁のようです。友人の記録も同人誌の刊行も一切は大学の外にあるのです。

安吾の作品と評伝などは本学の蔵書中もっとも読まれる類で，そのほとんどは書棚におさまっていることがありませんし，時々戻ってくる全集の数冊さえとても傷んでいます。このように読まれるとしても読者の方には東洋大学とのかかわりはあとで年表の一項目で知る位で〝安吾自身とその作品にひかれて〟ということが普通のようです。

安吾と大学の結びつきを強調するのはそれ程意味のないことかもしれません。ただ，むさぼるように読まれ愛されている作家の一人が本学の出身であること，在学中の勉学のはげしさなど記憶にとどめて私達のよりどころとすることは出来まし

ょう。さる6月10日，私達は坂口夫人をおたずねしました。唐突でとりとめもないことばかりうかがったのですが〝徒党を組むのが大嫌いな人でした〟とか，あまり着なかった安吾服，競輪にこったあげくの訴訟，原稿を書かず若い編集者をなかせた事など心よく故人の想い出を話して下さいました。全集等の御寄附をいただくなどすぎたことばかりでしたが，御好意の一端は本学の図書館におさめさせていただきました。旧来の蔵書とあわせて御利用下さい。

× × ×

本館所蔵・坂口安吾の著作と論集

◦ 坂口安吾の著作

1. 定本坂口安吾全集　全13冊（冬樹社）
2. 現代日本文学全集，第49　（筑摩書房）
3. 日本現代文学全集，第90　（講談社）
4. 全集・現代文学の発見，第8（学芸書林）
5. 現代日本の文学，第26　（学習研究社）
6. 名著復刻全集・近代文学館，124
   （日本近代文学館）「日本文化私観」（複刻）
7. Modern Japanese storees（Tuttle）
   「The Idtot（白痴）」の英訳あり
8. 坂口柄吾「いづこへ」　（真光社）

◦ 安吾研究・資料

1. 檀一雄「太宰と安吾」　（虎見書房）
2. 兵藤正之助「坂口安吾論」　（冬樹社）
3. 奥野健男「坂口安吾」　（文芸春秋）
4. 三枝康高「太宰治と無頼派の作家たち」
   （南北社）
5. 坂口三千代「クラクラ日記」　（文芸春秋）
6. 関井光男，編「坂口安吾研究」　（冬樹社）
7. 庄司肇「坂口安吾」　（南北社）
8. 国文学・解釈と鑑賞，484号（1973.7）
   特集「聖と俗・坂口安吾」
   （編集委員会）

～～～～～～～～～～～～～～～

「雑誌目録」作成にあたって

この春，工学部分館では「雑誌目録」を作成した。これは当分館で所蔵している雑誌の総合リストである。雑誌の所蔵リストは図書館サービスのために必需のものであり，特に工学部においてはその必要性が度々痛感されて来たものであった。しかし図書館内部での準備がととのわず，今までその作成がのびのびになっていたのである。昨年の秋，分館運営委員会において「雑誌目録をつくるように」と云う要請を受け，しかもその期限を今年の三月末までにと定められた時，我々は直ちにその準備に入った。

雑誌目録作成のためには，㈠雑誌の一点一点をその誌名変更，合併，分割などを細かにたどって資料をつくること。㈡欠号を現物にあたって再確認すること。㈢配列上・記入上の諸問題を解決することなどがなされねばならない。それにはかなりの労力が費されねばならないが，誰も自分の仕事を離れるわけにいかず，従ってそのための専門職員をさくだけの余裕がなかったので，各人が自分の仕事をもったまま，互に協力しながら作業を進めることにした。先ずカードに一点ずつ，誌名，所蔵巻号，出版年，欠号などを記入していった。書庫，建築科図書室，数学科図書室と調べ終った後，それらのカードを整理・配列し，原稿の下書きをつくっていった。その下書きを更に再び現物と照合し，多くの不備や欠点を正した後，あらためて，和雑誌は所定の原稿用紙に，洋雑誌はタイプによって清書した。

さて，印刷・製本をどうしようか，と云うことも大きな問題であった。業者にまかせることも考えてみたが，まだ内容的に不充分なものなのでとりあえず自分達でしようではないかと云うことになった。次回，内容を良くした改訂版を出すときには立派な印刷・製本の体裁良いものにするつもりである。そこで，和雑誌のタイプは教養教務室の泉さんにお願いし，洋雑誌は自分たちでタイプした。印刷は教学科の坂井氏にお願いした。そして出来上った印刷物を，三月末のがらんとした閲覧室の机の上にいっぱいに並べて，館員が一枚一枚とそろえていった。最後にホッチキスでとめて表紙をつけて完成した次第である。

しかしながら何分にも短期間内に作成したために，欠号表示などの見落したものも多いと思われるし，その他色々と欠点もあるが，館員が協力し合ってやっとつくりあげたものであるので，少しでも学問研究のために，役立ってほしいと願う次第である。

中村　準一（分館）

参考図書の解題

—社会学関係—

(1) 社会学辞典　有斐閣　(361.03：S)

約300人にのぼる社会学，法律学，経済学等の専門家を動員して完成された辞典で，戦後の社会学辞典の中では最も標準的なものである。

項目については小項目主義が採用され，社会学だけでなく隣接関連分野の項目まで50音順に幅広く取り上げられている。又，主要な項目の末尾には参考文献又は主著が記されているほか，「を見よ参照」(→ジャーナリズム：例) も付されている。

索引については事項索引と人名索引があり，それぞれ和文篇と欧文篇にわかれている。

(2) マス・コミュニケーション事典

学芸書林 (361.54：M)

マス・コミュニケーションの研究者及び現場の実践に当っている各方面の専門家百三十数名の参加をえて完成された事典である。

マス・コミュニケーションの全体像をシステム的に把握するために個々の概念の定義や諸事実の説明に当てる小項目と，それらがシステム全体の中に占める位置と役割りを明確にすべく，個々の部分の相互関連性が中項目と大項目とによって示されている。

巻末には詳細な年表及びマスコミ文献目録のページをもうけるといった配慮がされていて研究者にとって実用性の高い事典となっている。

索引は事項索引と人名索引にわかれ，それぞれ50音順に排列されている。

(3) 都市社会学に関する文献総合目録

東京都市社会学研究会 (361.48：T—2)

この文献目録には明治以降昭和43年までの間に日本において刊行あるいは発表された都市社会学関係の文献が収録されている。

都市社会学に関連する分野で都市社会学に直接関係するものや間接的に関係するもののうち必要と考えられるものも可能な限り収録されている。

収録文献数は二千に近く，研究者のいちじるしい増加，立場や方法及び問題関心の多様化というような状況の現出に対応するために17の大分類項目に配分されている。巻末には著者別索引がある。

—工学部関係—

(1) '73工業技術雑誌年鑑

工業技術雑誌年鑑刊行会 (505.9：K)

日本の工業技術は日毎に発展してゆき，それに伴い論文や資料は増大してくる。その整理とともに，これが実際面に活用される方法が必要となってくる。

この本は，'73版の年鑑で，これに収録されている工業雑誌は1972年1月～12月までに発行されたものである。この中に収められたものは190種余りの和雑誌で，一般雑誌のほかに学会誌（論文集も含む），協会誌，資料等であり，それらの目次を収録したものである。

記述方法は，工業に関する12の分類表を作り，それに雑誌を分類する。そして雑誌名，出版社，出版社の住所，電話番号が記され続いて1年間に発表された雑誌が，論文・資料名，執筆者名，所属（大学・研究所，会社名），月号，掲載頁数の順で記されている。工学部では雑誌が資料として重要な役割をしめているため，研究者が常に求めている〝誰が，いつ，どんな論文を，何に発表したか〟を年次毎にまとめてあるため資料探索のtoolとしてたいへん利用価値があると思う。又執筆者名索引，出版社索引が完備している点も見のがせないところである。

□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□

投書箱から

未整理の雑誌のカードを作成してほしい。

史学科4年　岩　瀬　俊　央

（係から）　雑誌は逐次刊行物と呼ばれる出版物の一つです。逐次刊行物とは終刊を予測せずに定期又は不定期に継続して刊行される出版物の総称です。雑誌の他に逐次刊行物（以下逐刊という）と呼ばれるものには，新聞・年鑑・年報・白書や官公庁が刊行する官報・公報・広報・統計書や各大学・学会などが刊行する紀要・要覧・会報・報告書などがあります。

現在，当館の係が逐刊として直接取り扱っているものには，雑誌，新聞，官公庁が刊行する出版物，各大学，学会などの紀要・会報・報告書など

があります。

その他の逐刊，すなわち年鑑・年報・白書・統計書・要覧などは参考図書として取り扱い，参考雑誌室で閲覧できます。

逐刊の受け入れ方は購入と寄贈に大別することができます。購入は，雑誌・新聞，官公庁の刊行する出版物の一部がその主なものであり，寄贈には，各大学・学会や官公庁の刊行する出版物などがあります。

さらにこれら受け入れられた逐刊のうち長く保存を要するものは，一定期間を経て製本いたします。製本された逐刊は一般図書と同じ取り扱いになって，主題によって分類され，請求記号が与えられます。この段階ではじめてカード目録に組み入れられるわけです。

したがって，製本されない未整理の雑誌や紀要などはカード目録からは検索不可能ということになります。この場合は，今のところ係が毎年度はじめに発行している「継続購入雑誌目録」，または参考雑誌室に設置してある「学術雑誌総合目録」で調べてもらうことになります。それでも検索できない場合は，直接，係に問い合わせてもらうということになります。

さて，前提が長くなって申し訳ありませんが，投書者のご要望の未整理雑誌のカードを作成することは，上記の問題を解決する有力な方法です。しかし残念ながら，要員や経費などの問題もあって，今すぐにいかないのが現状です。係では今，逐刊取り扱い業務の改善を目指して，他大学の実情を調べさせてもらいながら，具体策を検討しています。本件もその一環に入っていますので，しばらくは不自由をかけると思いますが，ご了承の上，お待ち願いたいと思います。

なお，工学部関係の雑誌については，本号6頁を参照して下さい。白山本館のものについても蔵書目録が完了次第に着手する予定です。

日　誌（5月～6月）

5月7日　人事異動（5月1日付），生野幸子（用度課），丹野裕子（図書課）図書館整理課勤務となる。
8日　分館運営委員会
14日　図書館関係会計監査（本，分館）
17日　白山連絡会
21日　運営委員会―運営方針，49年度予算，蔵書目録の配布などについて審議
分館会計監査（実地）
30日　分館図書選択委員会
6月4日　図書選択委員会―運営方針および49年度予算などについて審議
11日　白山連絡会
14日　私大図書館協会東地区研究部幹事会（於成城大学図書館，島田出席）
15日　私大図書館協会「書誌学分科会」図書館講座事務，教務部法社事務室への引継を完了
18日　私大図書館協会東地区部会（日本女子大図書館，大和田・篠原出席）
20日　「東洋大学図書館蔵書目録」第一巻，学内外への配布開始
27日　49年度第一回図書予選(於東京堂書店)

訂　正

(1)前号（Vol. 8, No. 4）5頁右下より13行目。

「6千5百万円を49年度図書費とすることが決定」を「49年度図書費として，総額で6千5百万円となる」と訂正します。理由は当委員会が「懇談会」であったため，「決定」する権限がなかったためです。

(2)前号（Vol. 8, No. 4）8頁左の記事を次のように訂正させていただきます。

訂正個所	誤	正
上から7行目	3月末日に	3月末日までに
〃　16　〃	第一巻	第1巻
〃　22　〃	このあと	なほ，このあと
〃　23　〃	索引篇	索引篇2巻

編集後記

今号から編集委員を交替しました。どうぞよろしく。初心者ばかりで苦心惨憺，やっと発行にこぎつけました。今後も図書館と利用者とのパイプとして役立ったらと思います。ご意見，感想等お寄せ下さい。　（村田，丸山，藤野，板場）

東洋大学図書館ニュース　KO∑MO∑　Vol. 9, No. 1（通巻26号）1974年7月10日発行　編集：図書館ニュース編集委員会，発行人：大島建彦，発行所：東洋大学図書館　東京都文京区白山5丁目28番20号　Tel (945) 7314番